

第34週(8月19日～8月25日) トピックス:<後天性免疫不全症候群>

京都市では、半期ごとのエイズ患者*・HIV感染者**数を集計し公表しています。市内の医療機関から、2024年1月から6月末までに、エイズ患者2例・HIV感染者2例、計4例の報告がありました(令和6年8月30日公表、下記URL参照)。本感染症は感染症法において5類感染症(全数把握)と規定されており、診断した医師は7日以内に届出なければなりません。

本市の年間報告数は、2006年の25例をピークに減少し、2020年までは年間9～19例で推移していましたが、新型コロナウイルス感染症が流行中の2021年～2022年とはともに年間4例と大きく減少し、2023年には再び増加して13例となりました(図1)。全国では2013年の1,586例以降、減少傾向となっていました、2023年は951例で、前年(893例)に比べ、やや増加、さらに本年は6月末時点で512例と2023年の半数を超過しています(図2)。

なお、診断された時点でAIDS(いわゆる「いきなりエイズ」)であった割合は、平均すると全国ともに約3割となっています(図1、2)。

昭和62年以降の京都市の累積報告数393例の詳細を見ると、エイズ患者135例(34.4%)、HIV感染者258例(65.6%)となっています。また、推定感染経路では、性行為感染が最も多く、302例で全体の76.8%を占めています。中でも、男性同性間の性行為感染185例(47.1%)が全体の半数近くを占めます。しかし、異性間も105例(26.7%)と決して少ないわけではありません(図3)。

近年のHIV感染症の薬剤と治療法の進歩により、万一HIVに感染しても、早期に発見し、適切な治療を行えば、通常の生活が送れるとともに、二次感染の予防にも繋がります。感染初期は自覚症状がなく、検査を受ける以外に感染しているかどうか分かりません。京都市では、HIVに加え、性感染症(梅毒・淋菌・クラミジア)検査を無料・匿名(予約制)で実施しています。感染の機会や不安がある場合には、京都市の検査を利用または各医療機関を受診しましょう。また、不特定多数の相手との性交渉は避け、性的接触の際にはコンドームを正しく使用しましょう。

*エイズ患者：HIV(ヒト免疫不全ウイルス)に感染し免疫機能が低下したことにより、様々な感染症や悪性腫瘍など23の指標疾患を発症し、エイズの診断基準を満たしたもの(すでにHIV感染者として報告されているものがエイズを発症する等、病状に変化を生じた場合は除く。)

** HIV感染者：HIVに感染し、無症候性キャリアとして報告されたもの、または何らかの症状はあるがエイズの診断基準を満たさないもの

○京都市情報館「エイズ患者・HIV感染者数について」(広報資料)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000331489.html>

○京都市情報館「京都市のHIV検査・相談について」

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000271215.html>

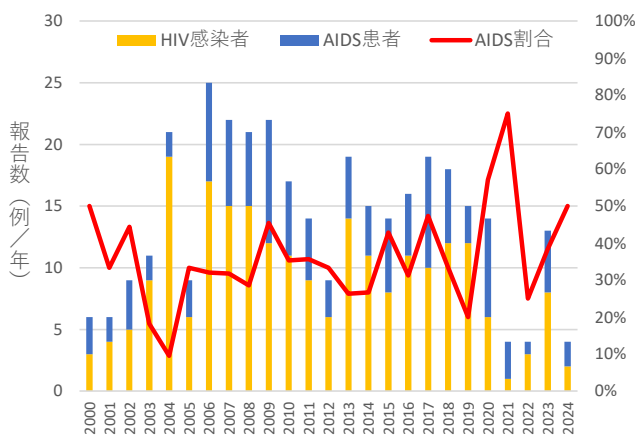


図1. 京都市のHIV感染者/AIDS患者数の推移
(2000年～2024年6月まで)

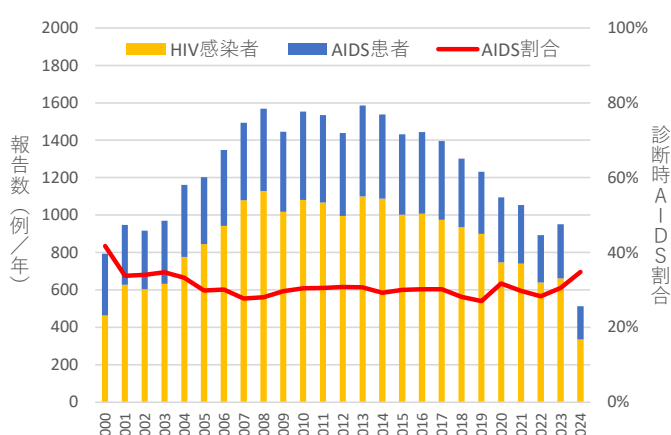


図2. 全国のHIV感染者/AIDS患者数の推移
(2000年～2024年6月まで)

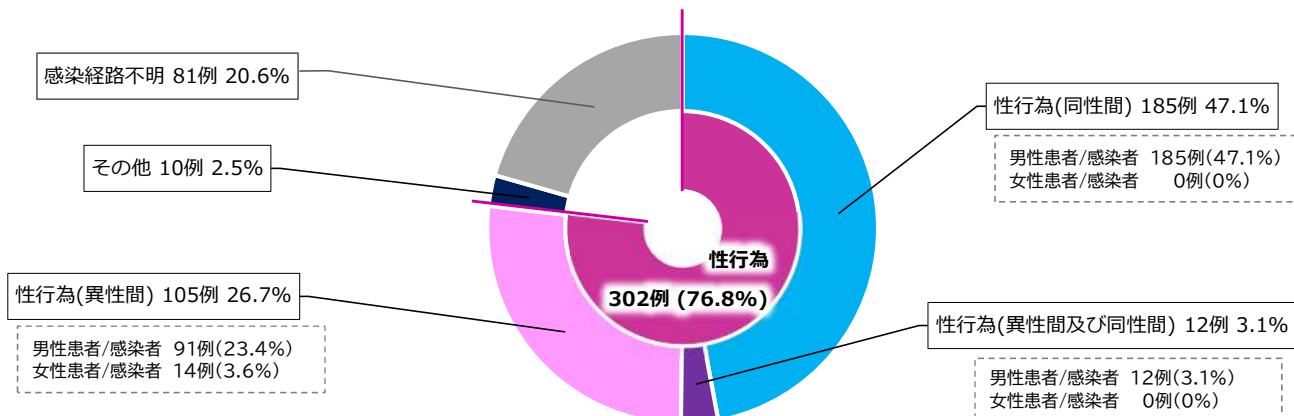


図3. 京都市の推定感染経路別の報告割合(昭和62年～令和6年6月)